群馬・鯉沼東（こいぬまひがし）Ⅱ遺跡

1　所在地　群馬県伊勢崎市三和町
2　調査期間　一九八四年（昭59）一月～五月
3　発掘機関　㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団
4　調査担当者　飯塚　誠
5　遺跡の種類　集落跡
6　遺跡の年代　古墳時代前期～江戸時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

鯉沼東Ⅱ遺跡は、伊勢崎市街地の中心部から北東へ約四km程離れた、大間々扇状地の西端部に位置しており、赤城山の伏流水を源とする「大井戸」の湧水池の開析谷によって区切られた微高地上にある。本遺跡の南には、五世紀末築造の丸塚山古墳、飛鳥時代の寺院跡として知られる上植木廃寺跡などがあり、北には、推定・東山道佐位駅家や女堀などがある。また、付近では縄文時代の住居跡、古墳時代～平安時代の集落跡、粕川左岸の古墳群などの発掘調査が行われている。

（前橋）

鯉沼東Ⅱ遺跡の調査は、上武国道建設に伴う事前調査であり既に土地改良事業が済んでいて遺構の残りは悪かったが、古墳時代～平安時代の竪穴住居跡一二棟・地下式土壙一基・井戸跡一四基・土壙墓一四基・馬歯骨が埋められた溝跡などが検出された。出土遺物の大半は土師器であるが、緑釉陶器・墨書土器・板碑などもあり、本遺跡の性格付けに問題を残している。

さて、木簡が出土した遺構は、調査区のほぼ中央東側から検出された素掘りの五号井戸である。規模・形状は、一辺が九四cmの隅丸方形を呈し、深さ二三五cmであるが、上縁部（後二m）から約五〇cm下までは漏斗状になっている。井戸枠などの設備は検出されなかったが、方形部の掘形軸線は磁北と一致しており、しっかりとした造りであった。伴出土器は無かったが、井戸の埋土中に天仁元年（一一〇八）浅間山噴火の降下軽石であるB軽石を含む黒褐色土が混入していたことなどから、遺構の年代として、平安時代末期～鎌倉期に比定したい。

8　木簡の釈文・内容

釈文等については、独自に実測・赤外線写真撮影も行ったが、保存処理を依頼した奈良国立文化財研究所の鬼頭清明氏によるものである。書風から一二～一三世紀代のものであるとのことである。

(1)
・「□(梵字)赤口日苦難節滅　」
・「三寶□依所　修加持故」　160×32×2

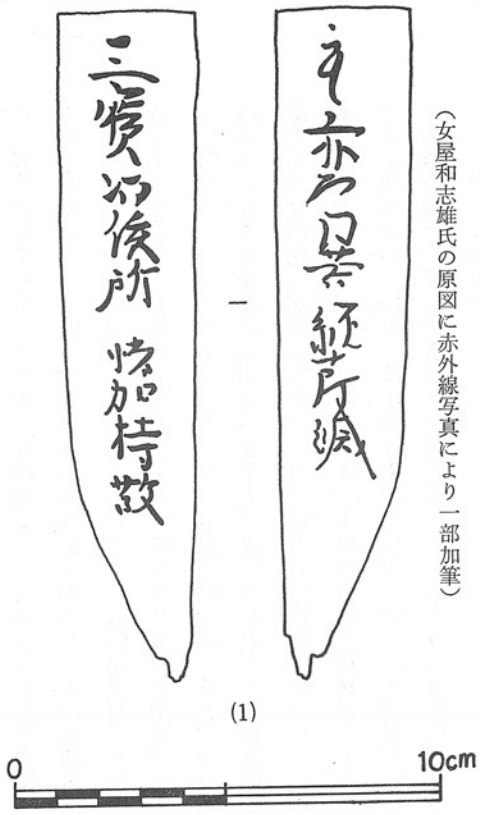
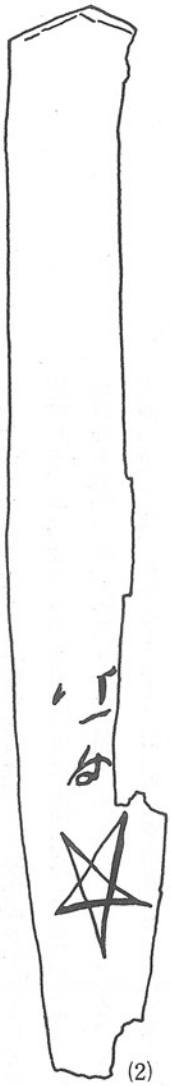
(2)
「□□□(呪カ)唵々如律令　☆」　(257)×(38)×1

木簡(1)には、金剛鑁菩薩を示す種子があり、真言密教の影響を受けたものであることが窺える。また、(2)は、下端部が折損しているが、上端部を圭頭状にして、下半部を鋭く尖らせ斎串状を呈した呪符木簡である。上部及び他面にも文字の痕跡が認められるが、風化していて判読不可能であり、まじないの内容は判然としない。道教の影響を受けたものである。

9　関係文献

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『年報―3―』(一九八四年)

(飯塚　誠)



(女屋和志雄氏の原図に赤外線写真により一部加筆)